

# 川上弘美『神様 2011』論

——「神様」の意味の不確定性を前提にして——

石川 拓音

## 一 はじめに

川上弘美「神様 2011」(『群像』第六六巻第六号、二〇一一年六月)は、二〇一一年三月に起こった東日本大震災、福島第一原発事故を受けて、作家自身がデビュー作である「神様」(『GQ JAPAN』第二巻第七号、一九九四年七月)を改稿して発表された作品である。「神様」、作家の「あとがき」と併せてそれを一まとまりとして雑誌に発表され、以上の構成で単行本『神様 2011』(講談社、二〇一一年九月)をはじめアンソロジーまでそれぞれの媒体に収録されている。中でも「神様 2011」は、「神様」のプロットだけでなく本文もほぼそのままに、原発事故を示唆する「あのこと」以来の物語世界に即して表現が書き直されているという特徴がある。川上自身が本作の試みについて「書いた当時は半ばSF小説のようなつもりでした。ところが半年が経過してみると、小説中のたくさんの場面が現実の日

常風景になってしまった」と発言していること<sup>①</sup>から、作家にとって本作は、原発事故が起きた近未来小説を意図しながらそれに収めることができないう作品としてあるのだと考えられる。また、単行本収録時には、初出時の「歩いて二十分ほどのところにある川原である」(二〇四頁)と、「あのこと」の後の数年間は、いっさいの立ち入りができなくて(二〇五頁)という文章の「の数年間」が削除され、これらの異同には風評被害を受ける福島の現状への配慮が垣間見える<sup>②</sup>だろう。

「あの事故を言語化するやり方として適切かどうか、自分でも分からない」と作家自身が言っているように<sup>③</sup>、本作はその試みが手探りで論じられ、結果的に賛否も二分されることになる。例えば陣野俊史は「自分が過去に書いた作品を大胆に自らの手で改作する姿勢には、すでに発表され安定した評価を得ている小説を、みずからの手で小説ならざるものへと変えてしまっても構わない、という強い意志に支えられている」として、その「不格好な小説」の「まったく新しい方法」<sup>④</sup>を、

千葉一幹は放射能汚染の問題について「当時求められたのは、作家としての即興的対応であつたはずだ」として、「川上の採用したプリコラージュという方法は、ハナシの持つ即興性、自由性を示すものであつた」と指摘し、それぞれ肯定的に評価している。反対に関谷一郎は「神様2011」は川上なりのコミットメントの仕方だったのかも、しれない。だったら「神様」の優れた達成に甘えて乗ったりせずに、最初から新しいコミット作品を創り上げるべきだった」と述べ、同様に水牛健太郎も「安易な感じ」「結果は台無しもいところ」と、『神様2011』を発表した作家の試みそれ自体を酷評している。

このように本作は、論者を少なからず戸惑わせるような向きがある。その中で、テクストの具体的な表現に着目した先行研究としては、例えば木村明子が、物語の現在時間が「あのこと」の数年後に設定されていることに注目し、「あのこと」が限定されていないことによつて、フクシマ後の予言とは別の次元の小説の普遍性をも確保する。「あのこと」は、世界のどこかで過去にそして未来に起こる原発の事故を指しているともいえて、二〇一一年の限定を超えて世界への予言としても読まれ得る」と指摘している。木村論と同様、「あのこと」の持つ意味を視座に据えた高橋正人は、「東日本大震災はこれまでの大震災だけでなく、原発事故を併発したということから未曾有の災害として、単なる災害とは一線を画す《人類史》に残るもの」であることを前提に、『神様2011』における時間は、日常に流れている時間とそれを包み込みながら日常を支える時間と、それらを人類史的な規模で包み込む時間という層構造をなしている」として、「東日本大震災（以前）と（以後）との世界の狭間で生きるものへのメッセージが発せら

れているかを静かに問い返す（時間）を体感すること」に本作を読む意義があると分析している。

以上の高橋の卓見からも、「神様2011」発表の意味は、「神様」との比較によつて見出されてきたと言える。しかしその一方で、そもそも議論の余地として残っているのが、それではなぜ「神様」が書き直されたのか、という「神様」改稿の必然性である。川上は「神様」発表から約四年後、その後日譚として「くま」と草原へ散歩に出る「草上の昼食」（『マリ・クレール 日本版』第一七巻第六号、一九九八年六月、原題は「草の上の昼食」）を発表している。「くま」が「故郷」に帰ることになる「草上の昼食」については、先の高橋論でも『神様2011』は、「あのこと」を経た後のわたしとくまとの別れを描くであろう「草上の昼食2011」を予兆として準備していると言えらる」と言及されている。しかし、実際に「草上の昼食2011」は発表されてはいない。このことは「神様2011」が「神様」だからこそ書き得たテクストであり、その発表によつて逆に「神様」に潜在化されていた独自性を照射することになったとも言えるだろう。

以上の先行研究概観から、本論では川上弘美「神様2011」について、「くま」が登場する「神様」「草上の昼食」を参照しながら、川上文学の中で「神様2011」に改稿し得た「神様」の特徴を確認し、それを踏まえて、「神様2011」の特徴、また「神様」「神様2011」「あどがき」を併録した「神様2011」が川上文学にどのように位置付けられるのかを考察していきたい。

## 二 読み手自身の論理を相対化する偶然的な近接関係

川上文学における『神様 2011』の位置付けを検討するために、本節ではまず、「神様」の特徴を確認していきたい。先行研究において「神様」は、その後日譚である「草上の昼食」と併せて論じられる傾向にあり、それに加えて近年では、「他者」としての動物に着目したアニマル・スタディーズの手法での研究が試みられてもいる。中でも『神様 2011』を射程に入れた論として、松本和也は、「神様」「草上の昼食」の連関を「わたし」と「くま」のコミュニケーションの可否」を視座にして分析しながら、「神様2011」とは、現実世界がみえない／みえないとして排除してきたものを、「わたし」を通じて目に見えるもの、ふれることのできるもの（抱擁）として示し、しかも「わたし」が生きる日常の圏内に書きこんだ小説」であると指摘している。ほかに荒木奈美は「神様2011」では原発問題という具体的な形を取っているこの「静かな怒り」が、オリジナルの「神様」ではより本質的な人間社会に対する「静かな怒り」として、静かではあるがはっきりとした形をとって表れている」ことを指摘し、「草上の昼食」で「くま」に向かって、人間社会に無理に馴染むことではないし、人間に合わせる必要もないと言いつつ「わたし」は、「この「くま」の姿を通して、同時に自分が日頃から相容れないと感じている人間社会に対する複雑な思いを、怒りにも似た気持ちで見つめていたのではないか」と論じている。<sup>(13)</sup>

これらの先行研究は、「くま」に異質な動物であるための他者性を

読み取っているとと言える。しかし、「くま」について異質性と同時に留意したいのが、人間との同質性である。

くまは、雄の成熟したくまで、だからとても大きい。三つ隣の305号室に、つい最近越してきた。ちかごろの引越しには珍しく、引越し蕎麦を同じ階の住人にふるまい、葉書を十枚ずつ渡してまわっていた。ずいぶん気の遣いようだと思ったが、くまであるから、やはりいろいろとまわりに対する配慮が必要なのだろう。

（「神様」五一―六頁）

「神様」における「くま」は「雄の成熟したくま」でありながら、人間と生活し人語を話すことができる。「わたし」は「くま」が「くまであるから」「まわりに対する配慮が必要なだろう」と推測して、動物であるはずの「くま」の異質性をそのまま人間の同質性の文脈に接続してしまう。「くま」は人間と異質であると同時に同質である。

このような両義的な「くま」が人間と共存していることで、高柴慎治は「ファンタジックな文脈とリアルな文脈とがぶつかりあって、具体的な意味の形成が困難になっていくこと、そのことが部分部分の意味の形成だけでなく、全体の意味の形成にまで及んで」、「神様」が「意味の形成が挫かれ、物語の形成が挫かれつづける」という、物語としてはきわめて逆説的な物語」であると論じている。<sup>(14)</sup>

このような「くま」、そして「くま」と散歩する「わたし」との関係の意味の不確定性にこそ、「神様」の特徴があると言える。拙論で

は「わたし」がただそこにいてかつ「くま」に名前がないことを踏ま  
えながら、「神様」において、「わたし」と「くま」の関係は、それ  
に読み手が物語の意味を見出せるようなものとして、まるで機能して  
いない。つまり、「神様」とは、「わたし」と「くま」が散歩する物語  
なのである。しかしそのような読みこそが「神様」の独自性であり、  
あらゆる読み手にテキストを読むという行為を永久的に強いる深淵  
になっていることを指摘した。<sup>15</sup>

「神様」は、確かにそこに意味を存在させる言語的構築物を創造し  
ながらそれを意味付けようとする読み手を、どこまでも意味付けでき  
ない地平へと導いていく川上文学における象徴的な作品だと言える。  
本節では、このような一義的に意味付けることの不可能性を提示する  
「神様」について、「神様 2011」との連関を射程に入れてその特  
徴を改めて確認する。

「神様」の意味の不確定性を指摘する論では、散歩を終えた「わた  
し」と「くま」が、抱擁を交わすような親密な関係になる一方で、し  
かし実際には、集合住宅の隣近所に過ぎないという関係が前提として  
ある。このことは逆説的に、集合住宅というモチーフが、関係らしい  
関係を成立させ得ない、住人を個別に隔絶する空間として機能してい  
ることを明らかにしている。

「わたし」と「くま」が住んでいる集合住宅は、初期川上文学にお  
いて繰り返されるモチーフの一つであり、「神様」で始まり「草上の  
昼食」で終わる短編集『神様』（中央公論新社、一九九八年九月）も、  
同じ集合住宅の住人との交流が連作形式で描かれる。集合住宅を物語  
の設定とした「神様」について、清水良典は「三つ隣の305号室」

とか「引越し蕎麦」や「葉書を十枚」というミニマルな具体性と、  
のつべらぼうの「くま」のとりとめのなさは対照的と見えるが、じつ  
はどちらも固有の顔や肌触りを持たない空虚な抽象性において共通  
している。つまり集合団地の生活の具体性と匿名性が、人の名前でな  
く、いつそ飛躍して「くま」と結びついたところに、この物語の才気  
と柔軟さがある」と指摘している。<sup>16</sup>

しかし、このような名前のない「くま」について、ここで「わたし」  
が「昔気質」と語って特徴付けていることに注目したい。そもそも「わ  
たし」と「くま」の散歩は、昔気質の「くま」が「わたし」と「あ  
るか無しかわからぬような繋がりに感じ入っていたことが背景とし  
てある。

表札を見たくまが、

「もしや某町のご出身では」

と訊ねる。確かに、と答えると、以前くまがたいへん世話にな  
った某君の叔父という人が町の役場助役であったという。その助  
役の名字がわたしのものと同じであり、たどってみると、どうや  
ら助役はわたしの父のまたいとこに当たると述べている。ある  
か無しかわからぬような繋がりにあるが、くまはたいそう感慨深  
げに「縁」というような種類の言葉を駆使しているかと述べた。  
どうも引越しの挨拶の仕方といい、この喋り方といい、昔気質の  
くまらしいのではあった。

（「神様」六頁）

「某町の出身」でありながら「くま」と同様に引越してきた集合住宅の住人である「わたし」に、「くま」は以前「たいへん世話になった」という「某君の叔父」と血縁関係にあることを理由に、親密さを感じている。その親密さから「くま」が「わたし」を散歩にさそうことで、「神様」では、同じ集合住宅の隣近所に住んでいる住人の関係の不成立が乗り越えられているのである。

このような集合住宅において成立した関係を特徴付ける言葉として機能しているのが、「くま」が感慨深げに述べた「縁」である。「縁」という言葉は「くま」自身が、「某君の叔父」に「世話になった」と、その「某君の叔父」と「わたし」が血縁関係にあること、その「わたし」と同じ集合住宅の隣近所に住み合うことになったことを説明付けるために使用されている。

以上の「縁」が内包している関係性の中で、ここで「某君の叔父」と「わたし」の血縁に注目したい。「神様」が異類婚姻譚の変形であると指摘する小谷野敦は、「くま」が衣類を身につけずに全裸で直立して抱擁を交わしているだろうことに着目し、『センセイの鞆』(平凡社、二〇〇一年六月／初出は、『太陽』第三七巻第七号／第三八巻一二号、一九九七年七月／二〇〇〇年二月)などの他作品を踏まえながら、川上文学が「ベニスなきオスを願望している」ことを概観している。<sup>(1)</sup>

小谷野の指摘には首肯することができ、「神様」の物語世界において、「わたし」と抱擁まで交わす「くま」には、人間との生殖の不可可能性が前提化されていると言える。「わたし」と「某君の叔父」の血縁には、人間同士の生殖が前提としてある一方で、人間と生殖不可能

な「くま」は、人間と血縁関係にあることができない。このことを踏まえると、「くま」と「某君の叔父」、そして「わたし」の「縁」という関係性の中で、「わたし」と「某君の叔父」の血縁関係は、「くま」の人間との異質性を浮かび上がらせてもいると指摘できる。

その一方で、このことは同時に、「くま」が、「世話になった」「某君の叔父」の遠縁と隣近所になったという偶然的な近接関係を根拠にして、「わたし」に親密さを感じ、人間と繋がりが得ていることを明らかにしている。このような偶然的な近接関係を原因とするからこそ、「くま」と人間の親密な関係は成立し得ると言える。

併せて参照したいのが、「神様」の意味の不確定性である。「わたし」と「くま」の関係を意味付けることは、その関係に論理を見出すことでもある。しかし、そもそも「くま」に見出された意味付けは、「くま」の人間との異質性と同質性どちらかに依拠した論理を、読み手自身が恣意的に前提化していることを照射することになる。拙論をはじめとする先行研究が指摘しているように、「神様」とは「わたし」と「くま」が隣り合って散歩することで親しい関係になるというただそれだけの物語でしかない。このことを踏まえると、「くま」が「わたし」に感じた親密さは、人間と異質でかつ同質な「くま」を一義的に意味付けるためのその論理を、偶然的な近接関係が相対化していることを示唆していると言える。「わたし」と「くま」は、意味付けできない分節不可能な「わたし」と「くま」という存在として、ただ「隣近所に住み合っているから親しい関係になった」のであり、「神様」における「わたし」と「くま」の関係には、唯一そのような意味付けのみが成立し得るのである。

以上の指摘を踏まえると、「神様」の物語世界が集合住宅とその周辺に設定されていることについても、住人がそれぞれの個別の意味付けを看取し合わない空間として、集合住宅が機能していると指摘できるだろう。また、このような恣意的な論理を前提とした意味付けを相対化する偶然的な近接関係については、実は、「わたし」と「くま」の関係だけでなく、川原で出会う「男性二人子供一人の三人連れ」の関係にも見出すことができる。

「お父さん、くまだよ」

子供が大きな声で言った。

「そうだ、よくわかったな」

シュノーケルが答える。

「くまだよ」

「そうだ、くまだ」

「ねえねえくまだよ」

何回かこれが繰り返された。シュノーケルはわたしの表情をちらりとうかがったが、くまの顔を正面から見ようとはしない。サングラスの方は何も言わずにただ立っている。子供はくまの毛を引っ張ったり、蹴りつけたりしていたが、最後に「パーンチ」と叫んでくまの腹のあたりにこぶしをぶつけてから、走って行ってしまった。男二人はぶらぶらと後を追う。

〔神様〕九一〇頁

「三人連れ」について「シュノーケル」が「子供」の「お父さん」

である一方で、「男性一人」と「子供」の間には生殖を前提とした関係性を看取することができない。仮に「サングラス」が女性であったとしても、そもそも「三人連れ」を生殖関係に依拠して意味付けけようとすることは、そのような読み手の恣意的な論理を照射することになる。これは、「三人連れ」をゲイカップルと意味付ける読みでも同様である。しかし、「シュノーケル」と「子供」の父子関係に、男性である「サングラス」が近接していることで、三者の関係はまさしく「三人連れ」としか意味付けされ得ないのである。

それと同時に、このように人間同士の偶然的な近接関係について指摘できる一方で、「シュノーケル」と「子供」の関係には確かに生殖関係を読み取り得ることも留意しておきたい。「神様」の意味の不確定性は、偶然的な近接関係を前提として提示されている反面、近接し合う存在がそれとして存在している以上、あらゆる意味付けが読み手によって見出され得るのである。

以上を踏まえると「神様」は、「わたし」と「くま」、そして人間同士の偶然的な近接関係が、意味付けけるという行為でそれ自体を相対化しながら、その意味付けの前提となる読み手自身の論理を照射するテキストであると言える。次節では、このような「神様」の特徴を踏まえて、「神様 2011」の特徴について確認していく。

### 三 誘引される意味付けと変わらない近接関係

前節では「神様」について、「わたし」と「くま」の近接関係がそれを意味付けけようとする読み手の論理を相対化することを確認した。

また、「男性二人子供一人の三人連れ」について、人間同士の生殖関係に依拠した意味付けが見出されてしまうことを指摘した。このことを踏まえながら「神様 2011」についてまず、「神様」と対応している川原の場面に注目したい。

遠くに聞こえはじめた水の音がやがて高くなり、わたしたちは川原に到着した。誰もいないかと思っていたが、二人の男が水辺にたたずんでいる。「あのこと」の前は、川辺ではいつもたくさんの人が泳いだり釣りをしたりしていたし、家族づれも多かった。今は、この地域には、子供は一人もいない。

〔神様 2011 二八頁〕

「神様」では「男性二人子供一人の三人連れ」が「わたし」と「くま」のそばに寄ってきた一方で、「神様 2011」では「今は、この地域には、子供は一人もいない」ことが語られている。放射能によって汚染された「この地域」では、放射線の影響を受けやすい「子供」が住めなくなってしまうのだと指摘できる。また、「この地域」に「子供」がいなくなったことは、「あのこと」の前の川辺に「家族づれも多かった」とことと対比されている。このことは、「子供」が「家族」の中で生まれ育つ存在であることを示唆していると考えられるだろう。

高橋源一郎は、『恋する原発』に挿入された「震災文学論」においてこの「川原のシーン」に着目し、「神様 2011」が「いったん書いた「子供」たちを「削除」し、目の前に現れた防護服の男たちの、

背後に、揺らめく影のような存在としておいた」ことによって、「この小説では、まだ生まれていない子供たちが「追悼」され」、「このわたしやあなたも所属している」共同体の未来に関わることを宣言している」と評している。前節の「神様」論では、「わたし」と「くま」の近接関係に読み手が生殖関係に依拠した意味付けを見出し得ることを指摘した。高橋の読みは、「神様 2011」では「子供」と「子供」を生み育てる「家族」がいなくなった「この地域」で生殖関係、また「家族」という近接関係が成立し得ないことを示唆しているのだと考えられる。

高橋の読みを踏まえて、続いて「男二人が、そばに寄ってきた」場面を確認したい。対応する「神様」の「三人連れ」の場面では、「くま」の異質性かつ同質性が明らかにされていた。

「くまですわね」

サンングラスの男が言った。

「くまとは、うらやましい」

長手袋がつづける。

「くまは、ストロンチウムにも、それからプルトニウムにも強いんだってな」

「なにしろ、くまだから」

「ああ、くまだから」

「うん、くまだから」

何回かこれが繰り返された。サンングラスはわたしの表情をちらりとうかがったが、くまの顔を正面から見ようとはしない。長手

袋の方はときおりくまの毛を引つ張ったり、お腹のあたりをなでまわしたりしている。最後に二人は、「まあ、くまだからな」と言つてわたしたちに背を向け、ぶらぶらと向こうの方へ歩いていった。

〔神様 2011〕二八一―二九頁

注目したいのが、「神様 2011」では「長手袋」の男が「くま」の異質性を「うらやましい」と取り立てて言うことである。前節では存在がそれとして存在している以上、あらゆる意味付けが見出され得てしまうことを指摘した。「神様 2011」において「神様」の対応する場面から「子供」がいなくなっていることを踏まえると、「この地域」で「子供」を生み育てることができない人間にとつて「くま」が「うらやましい」のは、「ストロンチウム」でも「子供」を生み育てることも強い。「くま」が「この地域」でも「子供」を生み育てることができると思われているからだと考えられることもできる。

以上の読みは、「くま」自身が「いくらなんでもストロンチウムやブルトニウムに強いわけはありませんよ」と言っているように、「くま」についての恣意的な意味付けを前提にしている。このような恣意的な意味付けが読み手の読みにおいて誘引され得るのは、「くま」の異質性が「神様」以上に明示されているからだと言える。

それに加えて、「神様 2011」において注目したいのが、「この地域」が放射性物質に汚染されていることで、「くま」だけでなく「わたし」の異質性までもが提示されていることである。

「防護服を着てないから、よけていくのかな」と言うくと、くまはあいまいにうなずいた。

「でも、今年前半の被曝量はがんばつておさえたから累積被曝量貯金の残高はあるし、おまけに今日のSPEDIの予想ではこのあたりに風は来ないはずだし」

言い訳のように言うくと、くまはまた、あいまいにうなずいた。

(中略)

「もしあなたが暑いのなら、もちろん僕は容積が人間に比べて大きいのですから、あなたよりも被曝許容量の上限も高いと思えますし、このはだしの足でもって、飛散塵堆積値の高い土の道を歩くこともできます。そうだが、やっぱり土の道の方が、アスファルトの道よりも涼しいですよ。そっちに行きますか」

などと、細かく気を配ってくれる。わたしは帽子をかぶつていたし暑さには強いほうなので断つたが、もしかするとくま自身が土の道を歩きたかったのかもしれない。しばらく無言で歩いた。

〔神様 2011〕二六―二八頁

「わたし」と「くま」が川原までの道を散歩する以上の場面で、「神様」と同様、車がよけていくことについて、「神様 2011」では「わたし」はあえて「防護服を着てないから」とその原因を意味付けている。しかし、車がよけていく原因は明示されず、「わたし」があえてこのように意味付けることで、「神様 2011」の読み手は、「神様」と比較した「わたし」の恣意的な意味付けに誘引されることになると言えらる。



しかし、以上のような「この地域」における人間同士の生殖関係と「家族」という近接関係の不成立、また意味付けの誘引から、「神様 2011」が、「あらゆる読み手にテキストを読むと言う行為を永久的に強いる深淵」としてあった「神様」とは対照的に、物語に確定的な意味を見出し得るテキストに変化したと指摘するには留保が必要である。車がよけていく場面において、その原因を意味付ける「わたし」に対して、「くま」は「あいまいにうなずいた」だけで、その心の動きが明示されない。「わたし」の恣意的な意味付けは、このような「くま」とのあいまいな対話の中で相対化されるのである。「わたし」と「くま」の関係の意味の不確定性がそれぞれの秘匿性を前提にしていた「神様」と比較すると、「神様 2011」では「わたし」と「くま」の偶然的な近接関係において、「くま」が「あいまいに」しか意味付けせずにただそこにいることで、意味の不確定性が提示されていると言える。

このような「神様 2011」における意味の不確定性について指摘するために、併せて「神様」で集合住宅の隣近所に過ぎなかつた「わたし」と「くま」の親密な関係の特徴付けることになった抱擁の場面を確認したい。

「抱擁を交わしていただけますか」

くまは言った。

「親しい人と別れるときの故郷の習慣なのです。もしお嫌ならもちろんいいのですが」

わたしは承知した。くまはあまり風呂に入らないはずだから、

たぶん体表の放射線量はいくらか高いだろう。けれど、この地域に住みつづけることを選んだのだから、そんなことを気にするつもりなど最初からない。

くまは一歩前に出ると、両腕を大きく広げ、その腕をわたしの肩にまわし、頬をわたしの頬にこすりつけた。くまの匂いがする。反対の頬も同じようにこすりつけると、もう一度腕に力を入れてわたしの肩を抱いた。思ったよりもくまの体は冷たかった。

「今日はほんとうに楽しかったです。遠くへ旅行して帰ってきたような気持ちです。熊の神様のお恵みがあなたの上にも降り注ぎますように。それから干し魚はあまりもちませんから、めしあがらないなら明日じゅうに捨てるほうがいいと思います」

（「神様 2011」三五—三六頁）

「体表の放射線量はいくらか高いだろう」ことが推測される「くま」との抱擁では、放射性物質が「わたし」の体表に付着するまたは体内に吸入される可能性がある。しかし、それでも抱擁を「承知した」「わたし」は、その理由として、自分自身が「この地域に住み続けることを選んだのだから」と語っている。このことは、集合住宅に住むことになった背景が語られなかつた「神様」とは対照的であり、「神様 2011」の「この地域」において、人間が「いくらか高い」放射線量を「気にするつもり」がないのでなければ、「くま」と抱擁を交わり、近接関係からただ親密な関係としてあることもできなくなつてしまつたことを明らかにもしているだろう。

しかし、そもそも「わたし」は「くま」との抱擁で、「いくらか高

い」放射線量を気にするつもりが「最初からない」と語っている。つまり、「わたし」自身は、「あのこと」によって変化することを「最初から」前提としていない。「神様」と同様ただそこにいる「わたし」として、隣近所に引越してきた「くま」と散歩し抱擁を交わしているのである。

このことを踏まえると、「神様」と同様に「神様 2011」も、「わたし」と「くま」が意味付けできない分節不可能な「わたし」と「くま」としてただ散歩する物語であると指摘できる。しかし、それでは「神様」はなぜ、「神様 2011」に改稿される必要があったのだろうか。次節では、「神様」と「神様 2011」が連関する意味について検討し、それを踏まえて、川上文学における『神様 2011』の位置付けを考察していく。

#### 四 語らせられる「わたし」と引越させられた「神様」

前節では、「神様 2011」について「神様」と同様の意味の不确定性が提示されていることを指摘した。「神様 2011」は「あのこと」以来の変化によって、逆に「神様」からの変わらなさが浮かび上がったもいると言えるだろう。このことを踏まえて、「くま」との散歩を終えた「わたし」が部屋に戻り、「神様」と同様に日記を書く場面に注目したい。

部屋に戻って干し魚をくつ入れの上に飾り、シャワーを浴びて丁寧に体と髪をすすぎ、眠る前に少し日記を書き、最後に、いつ

ものように総被曝線量を計算した。今日の推定外部被曝線量・30  $\mu$ Sv、内部被曝線量・19  $\mu$ Sv。年頭から今日までの推定累積外部被曝線量・2900  $\mu$ Sv、推定累積内部被曝線量・1780  $\mu$ Sv。熊の神とはどのようなものか、想像してみたが、見当がつかなかった。悪くない一日だった。

(「神様 2011」三六頁)

「神様」において「わたし」の日記の内容は明かされず、日記を書くという行為自体はただ「わたし」の日常の象徴として機能していた。その一方で、「神様 2011」において、日記の内容とは対照的に詳細に語られているのが、被曝線量の具体的な数値である。日記を書くことと被曝線量を計算することは、「あのこと」以来「この地域」に生きてきた「わたし」の日常を提示するという点でどちらも同じ水準で機能していると考えられる。しかし、「わたし」はあえて被曝線量のみを語る。日記の内容が語られていない以上、「わたし」にはここで被曝線量を語る必然性がないと言える。

日記の場面以外にも、「わたし」は「あのこと」以来、それが日常として前提化しているはずの放射能汚染について繰り返し語っている。このような「わたし」の語りは、「神様 2011」が「神様」とメタ的に比較されるテキストとして意図されていることが指摘できるのではないだろうか。

そもそも「神様 2011」という本作のタイトルも、それ自体が「神様」との比較を明らかに意図していると言えるだろう。このことを踏まえながら、「神様」と「神様 2011」が連関する意味につい

て検討していく。注目したいのが、「わたし」と「くま」が川で泳いでいる魚を見ている場面である。

小さな細い魚がすいすい泳いでいる。水の冷気がほてった顔に心地よい。よく見ると魚は一定の幅の中で上流へ泳ぎまた下流へ泳ぐ。細長い四角の辺をたどっているように見える。その四角が魚の縄張りなのだろう。くまも、じつと水の中を見ている。何を見ているのか。くまの目にも水の中は人間と同じに見えているのであろうか。

(「神様 2011」三〇頁)

「餌になる川底の苔には、ことにセシウムがたまりやすい」川の中で、放射性物質を体内に吸入しているはずの魚は、「神様」本文と一言一句同じように語り手「わたし」に見えている。ここで人間や「くま」と併せて動物として語られる魚が「一定の幅の中で」縄張りである「細長い四角の辺をたどっているように見える」とことは、「この地域」に住み続けている存在同士の関係それぞれ自体に変わりはないということを示唆していると言えるだろう。

その一方で、「くまの目にも水の中は人間と同じに見えているのであるうか」という「わたし」の語りについては、「魚の縄張り」が「あること」以来の「この地域」を示唆していることを踏まえると、留意が必要である。「神様」と「神様 2011」の「この地域」を比較することが誘引されている読み手は、「神様」と一言一句同じ「魚の縄張り」に、確かに「この地域」に住み続けている存在同士の関係の変

わらなさを読み取り得るだろう。しかし、そのような読みは語り手「わたし」の視点の変わらなさに依拠している。また、本節で確認したように「わたし」の語りは、「神様」と「神様 2011」をメタ的に比較させる書き手である川上弘美の意図に依拠していると言える。つまり、「神様」と同様の「わたし」の視点が川上の意図に依拠している指摘できる以上、ここで「わたし」が自身と「くま」の視点を比較することには、作家が意図した「神様」との変わらなさを前提にする読み自体の相対化が示唆されているとも考えられるのである。

以上を踏まえると、「神様 2011」は、「神様」と同様、「あらゆる読み手にテキストを読むという行為を永久的に強い深淵」としてそれぞれの読み手が、意味の不確定性を前提にしながら、福島原発事故についての自身の心の動きを確認していくテキストであるとと言える。また、その読み手は書き手である川上弘美自身でもあり得るだろう。つまり、「神様 2011」は、「わたし」と「くま」の近接関係に「神様」と同様の意味の不確定性を作家自身が確認するために書かれたテキストでもある。このことは、放射性物質に汚染された「この地域」に「くま」がわざわざ引越してきた理由を明らかにしてもいる。

「神様」とメタ的に比較されることが意図されている「神様 2011」において、「くま」は「わたし」が被曝線量を語らせられているように、作家である川上弘美によって「この地域」に引越しさせられたのだと考えられる。

「わたし」と「くま」の近接関係によって恣意的な論理を相対化する「神様」が、意味の不確定性を提示するという川上文学を象徴する作品であるからこそ、「神様」は「神様 2011」に改稿され得たの

だと言える。併せて、散歩を終えた「くま」が「わたし」に「またこのような機会を持ちたいものですか」と言ったことにも注目したい。

くまは305号室の前で、袋からガイガーカウンターを取り出しながら言った。まずわたしの全身を、次に自分の全身を、計測する。ジ、ジ、という聞き慣れた音がする。

「またこのような機会を持ちたいものですか」

わたしも頷いた。それから、干し魚やそのほかの礼を言うと、くまは大きく手を振って、

「とんでもない」

と答えるのだった。

(「神様 2011」三四頁)

「神様」において「くま」が言った「このような機会」は、ただの散歩の機会のみを指示していた。しかし、「神様 2011」ではそれだけでなく、物語世界において「あのこと」がまた起こったとしても、「わたし」と散歩に出たいという意味までを汲み取ることができ。このようにしてまた散歩に出ることが示唆されている「わたし」と「くま」の近接関係には、自身が構築したテキストによって、意味の不確定性を前提にしながらそれでもテキストを読み、意味付けることを読み手に誘引したいという、書き手である川上弘美の読み手に向けた本作の意図が読み取り得るだろう。

「あのこと」は必ずしも原発事故を指示しているとは限らない。川上弘美は本作を「神様」の「二次創作」と位置付け、「人のテキスト

を使うわけにはいかないから自分のを二次創作をして『神様2011』を作った」と語っている。また、『神様 2011』発表から十年後には、世界的な新型コロナウイルスの流行の中で「新型コロナウイルス」を多くとしたら、書き出しの一文はただ、「散歩に出る。」となるだろう」と書いていることにも留意が必要である。このような作家の言葉からも「神様」は、意味の不確定性を前提に絶えず書き直され得る。そして、書き直されたテキストに見出され得る恣意的な意味付けを相対化しながら、読み手それぞれが自身の心の動きを確認していくテキストなのだと言える。

## 五 おわりに

以上、本論では川上弘美「神様 2011」について、「神様」を改稿したその必然性と、川上文学における『神様 2011』の位置付けを検討してきた。「神様」は、「わたし」と「くま」の近接関係が、それを意味付けようとする読み手自身の論理を相対化するテキストである。「神様 2011」では「神様」と比較して「子供」がいなくなつたことで、「この地域」における生殖関係、また「家族」という近接関係の不成立が印象付けられ、「神様」以上に「くま」の異質性が明示されることで、恣意的な意味付けが誘引されていると言える。しかし、「神様」と同様に「神様 2011」でも、「わたし」と「くま」は分節不可能な意味付けできない近接関係にある。そこで「神様 2011」について、「わたし」の語りから「神様」とのメタ的な比

較が意図されていることを指摘し、「わたし」と「くま」それぞれが、作家である川上弘美に被曝線量を語らせられ、「この地域」に引越させられているというメタ的な水準での読みの可能性を提示した。

「神様 2011」は、「神様」の意味の不確定性を前提にしながら、あらゆる読み手がそれぞれの福島原発事故についての自身の心の動きを確認していくテキストである。意味の不確定性を提示する川上文学を象徴する作品であるからこそ、「神様」は「神様 2011」に改稿され、またテキストを読むという行為によって読み手それぞれが自身の心の動きを確認していくために絶えず書き直され得る。これを本論の結論とした。

「神様 2011」は、『神様 2011』において「神様」と併録されているからこそ、あらゆる読み手に自身の心の動きを確認させるテキストとして機能するのだと言える。また、このことを踏まえて、『神様 2011』に収録されている「あとがき」を参照したい。「あとがき」には、福島原発事故以来の川上自身の心の動きが書き記されていると考えられる。

2011年の3月末に、わたしはあらためて、「神様 2011」を書きました。原子力利用にともなう危険を警告する、という大上段にかまえた姿勢で書いたのでは、まったくありません。それよりもむしろ、日常は続いてゆく、けれどその日常は何かのことで大きく変化してしまう可能性をもつものだ、という大きな驚きの気持ちを含めて書きました。静かな怒りが、あの原発事故以来、去りません。むしろこの怒りは、最終的には自分自身に向かって

くる怒りです。今の日本をつくってきたのは、ほかならぬ自分でもあるのですから。この怒りをいだいたまま、それでもわたしたちはそれぞれの日常を、たんたんと生きてゆくと、意地でも、「もうやになった」と、この生を放りだすことをしたくないのです。だって、生きること、それ自体が、大いなるよろこびであるはずなのですから。

（「あとがき」四四頁）

以上のように「神様 2011」を書いた作家の心の動きとしては、「大きな驚きの気持ち」、また「自分自身に向かってくる」「静かな怒り」が提示されている。そして、このように自身の心の動きを確認するのは本作の読み手も同様である。「神様」「神様 2011」を読み比べたその読み手の心の動きにこそ、本作が、作家の手を離れてメディアに発表された意味があると言える。

それでは川上にとってこの「自分自身に向かってくる」「静かな怒り」とは、どのような心の動きなのだろうか。今の日本で原発事故が起きたことについて、川上は「あとがき」で以下のように書いている。

ウランの神様がもしこの世にいとすれば、いったいそのことをどう感じているのか。やおよろずの神様を、矩を越えて人間が利用した時に、昔話ではいっただいどういことが起こるのか。

（「あとがき」四三―四四頁）

ここで注目したいのが、日本古来の「やおよろずの神様」としての

「ウランの神様」を「矩を越えて人間が利用した」ことに示唆されている。「神様」のいる異界のイメージである。このような異界のイメージは、「神様」ではなくその後日譚とされる「草上の昼食」に提示されていると言える。

熊の神様って、どんな神様なの。

かみなりがおさまると、雨もじきに止んだ。くまはあたりに散らばっていたバスケットや水筒を拾い集め、泥汚れをタオルで大きっぱに拭きとり、ぶるぶると体を揺らして水を切った。水滴が飛び散る。わたしも真似をして体をゆすつてみたが、くまのようにうまくはまき散らせない。ひとしきり共に水をはねかせた後にわたしはくまに聞いたのであった。

「熊の神様はね、熊に似たものですよ」くまは少しずつ目を閉じながら答えた。  
なるほど。

「人の神様は人に似たものでしょう」  
そうね。

「人と熊は違うものなんです」目を閉じきると、くまはそつと言った。

「違うのね、きつと。くまの吠える声を思い出しながら、わたしもそつと言った。」

(「草上の昼食」一八七—一八八頁)

かみなりがおさまった場面で「熊の神様はね、熊に似たものですよ」

と「くま」が答えたことには、「神様」が「わたし」と「くま」それぞれの類型の象徴としてあることが示唆されている。また、「草上の昼食」において「息が以前よりも荒く」なった「くま」が落ち着くことになった「故郷」は、「くま」の終の棲家がイメージされてもいる。そのような「死」が印象付けられている異界は、意味付けできないカオス空間として、分節可能な世界と隔絶している。「わたし」が想像することもできない「神様」のいる異界のイメージは、反対にその「矩」を越えずに生きている「わたし」の生を照射していると指摘できるだろう。併せて「草上の昼食」における「わたし」は、「故郷」に帰った「くま」に手紙を書くことができない。言葉にならない「神様」へのお祈りは、意味付けできないものを意味付けてしまうことへの葛藤を示唆していると考えられる。

以上を踏まえて『神様 2011』の「あとがき」を参照すると、異界の意味の不確定性に葛藤することなく、人間が恣意的にそれとして意味付け、支配したつもりになっていたことに川上は「静かな怒り」をいだいたのではないだろうか。それと同時に、東日本大震災の一週間後に「神様 2011」を書いたという川上にとって、テキストを読むことで心を動かすことは、それ自身が「生きること」であり「大いなるよろこび」だった。永久的に意味付けることを強いる深淵は、それを意味付けようとする人間の心を絶えず動かし続ける。確定的な意味を見出し得ない物語として、「神様」の二重写しである「神様 2011」を提示した『神様 2011』の「あとがき」には、本論でも指摘した、川上文学の特徴としての意味の不確定性が前提化されているのである。

※「神様」「神様 2011」「あとがき」の本文は『神様 2011』（講談社、二〇一一年九月）、「草上の昼食」の本文は『神様』（中央公論新社、一九九八年九月）所収「草上の昼食」に拠る。本稿で本文を使用した場合、本文末尾の括弧内に作品名と頁数を記した。引用に際し、ルビの省略など適宜表記を改めた。

《注》

- (1) 川上弘美・菊地香「川上弘美 3・11とデビュー作書き直し」『サデー毎日』第九〇巻第四七号、二〇一一年一〇月一六日
- (2) ここでの「神様 2011」本文の引用は、『群像』第六六巻第六号（二〇一一年六月）に拠り、本文末尾の括弧内に頁数を記した。
- (3) 川上弘美「放射能汚染を物語る こんなにも「日常」は変わった」『朝日新聞』二〇一一年一〇月二八日付朝刊
- (4) 陣野俊史「第2章 フクシマへ」『世界史の中のフクシマ——ナガサキから世界へ』、河出書房新社、二〇一一年二月
- (5) 千葉一幹「第1章 人は震災にいかに向き合ったか」『現代文学は「震災の傷」を癒せるか 3・11の衝撃とメラノコリー』、ミネルヴア書房、二〇一一年三月
- (6) 関谷一郎「川上弘美「神様」の読み方・教え方——松本和也氏の論考をたたく台にして」『現代文学史研究』第二二集、二〇一四年二月
- (7) 水牛健太郎「季刊・文芸時評③二〇一一年・夏」『文学の言葉は遅い』、『三田文学』第九〇巻二〇一一年夏季号、二〇一一年七月

- (8) 木村朗子「第三章 被曝社会を生き延びるための小説」『震災後文学論 あたらしい日本文学のために』、青土社、二〇一三年一月
- (9) 高橋正人「文学国語」における深い学びを実現するための読みの可能性に関する研究——川上弘美「神様 2011」における「あのこと」の持つ意味をめぐって——『福島大学人間発達文化学類論集』第二八号、二〇一八年二月
- (10) 高橋正人、注(9) 前掲論文
- (11) 「神様」「草上の昼食」についての動物を視座にした論稿としては、大原祐治「動物・ことば・時間——（動物と人間の文学誌）のための覚え書き」『千葉大学人文社会科学研究』第三二号、二〇一六年三月）や石川義正「動物保護区の平和」『政治的動物』、河出書房新社、二〇一一年一月）などが挙げられる。
- (12) 松本和也「川上弘美の出発／現在 「神様」・「草上の昼食」・「神様 2011」」『川上弘美を読む』、水声社、二〇一三年三月
- (13) 荒木奈美「くま」の生きづらさを通して見えてくるもの——川上弘美「神様」「草上の昼食」論『ユリイカ』第四五巻第二二号、二〇一三年九月
- (14) 高柴慎治「川上弘美「神様」を読む」『国際関係・比較文化研究』第五巻第二号、二〇〇七年三月
- (15) 石川拓音「川上弘美「神様」「草上の昼食」論——「わたし」と「くま」の関係の意味の不確定性——」『日本文芸論稿』第四五号、二〇一三年三月
- (16) 清水良典「現代作家論シリーズ第一回 川上弘美覚書——フツウの「私」の行方」『文学界』第五〇巻七号、一九九六年七月

- (17) 小谷野敦「ベニスなき身体との交歓——『神様』『ユリイカ』総特集 川上弘美読本』第三五卷第一二号九月臨時増刊号、二〇〇三年九月  
月)
- (18) 高橋源 郎「恋する原発」『群像』第六六卷第一号、二〇一一年  
一二月)
- (19) 高橋源一郎・川上弘美「未来の読者へ」「子ども」の小説と「原発」  
の小説を書いて『新潮』第一〇九卷第七号、二〇一二年七月)
- (20) 川上弘美「寄稿 生きている申し訳なき」『朝日新聞』二〇一二年  
三月一三日付朝刊)

——いしかわ・たくと／博士課程前期二年——